

## 在台「日本人」の中のアジア・太平洋戦争

### 一、調査目的

帝国の植民地経験にけっして収斂できないさまざまな個人の体験から、アジア・太平洋戦争と帝国日本の植民地主義を再考したい。特に、植民地台湾のすべての人びとが帝国日本の「皇民」にならざるをえなかったアジア・太平洋戦争期を検討する主な時期にして、帝国日本のアジア・太平洋戦争を経験した人びとの語りを通して、下記の五つの課題の解明を目的とする。

- 1.人びとはその時期において、自分を帝国日本のなかでどのように位置付けざるをえなかったのか。
- 2.そうすることによって、どのような新たな包摂と排除を生みだしたのか。
- 3.越境し、または越境せざるをえなかった人びとはどのような交錯した関係を築いたのか。
- 4.「日本人」と「台湾人」というカテゴリーはこの時期において、どのように変容せざるをえなかったのか。
- 5.帝国日本が崩壊した「戦後」に、「日本人」と「台湾人」はどのような運命・選択におかれたのか。

### 二、主たる着目点

これまでの先行研究では、当時の人びとの体験に関する考察はあまり重要視されなかった。この数年、民衆の視点から大きな歴史を再検討しようとする研究は増えてきたが、当時の台湾に生活していた「内地人」に対しては、相変わらず「支配者」のようなまなざしは強いのである。そのためか、彼（女）たちの体験に関する調査は依然として極僅かしかなかったのである。彼（女）たちの当時における生活実態と心情はほとんど明らかにされていない。そこで、報告者はこれまで、彼（女）たちに対する聞き取り調査と関連する一次、二次史料の調査収集を努めてきた。今回の調査研究は主に平成 21 年度（第三次採択）の調査研究の成果を踏まえて、次の四つの課題に注目した。

- 1.在台内地人<sup>i</sup>男性の戦争体験。
- 2.沖縄と八重山の人びとの植民地台湾における生活と戦争体験。
- 3.戦後に体験したことの彼（女）たちの語りに与えた影響。
- 4.「台湾人」と「日本人」というカテゴリーの戦時下と戦後における変容（日本語世代の台湾人たちと戦後台湾に居残った、あるいは台湾に渡ってきた台湾人または中国人と結婚した日本人婦人たちが通っている日本語デイクアセンター玉蘭荘<sup>ii</sup>という場所を一つの事例として取り上げる）。

### 三、調査概要

#### 1. 調査方法<sup>i</sup>

①聞き取り調査。②参与観察。③史料調査。

#### 2. 調査期間/地/調査内容<sup>iii</sup>

- ①2010年7月10日～2010年7月21日：財団法人台湾協会<sup>iv</sup>と玉川大学教育博物館へ史料調査を行った。また、関東地方在住の植民地台湾で生活経験の持つ内地人男性5人、内地人女性3人、戦後に日本人に帰化した台湾出身の男性1人に対して、聞き取り調査を実施した。それを加えて、彼（女）たちが所蔵する一次史料の調査収集も努めた。
- ②2010年8月7日～2010年8月10日：北九州と広島県在住の植民地台湾で生活経験の持つ内地人男性4人と内地人女性2人に対して、聞き取り調査と彼（女）たちが所蔵する一次史料の調査収集を実施した。
- ③2010年9月7日～2010年9月14日：沖縄の那覇市とその周辺に在住する植民地台湾で生活経験の持つ男性6人と女性4人に対して、聞き取り調査と彼（女）たちが所蔵する一次史料の調査収集を実施した。そして、琉球大学と沖縄公文書館へ史料調査を実施した。その後は石垣島と竹富島へ渡り、八重山地域センターと石垣市史編集課と地方の出版社へ史料調査をした。それから、植民地台湾で生活経験の持つ男性5人と女性8人に対して、聞き取り調査と彼（女）らが所蔵する一次史料の調査を実施した。

④2010年10月15日～2010年10月30日：台湾台北市にある日本語ダイケアセンター玉蘭荘で、ボランティアとして参与観察をしながら、運営側をはじめ、支援者たち、そして参加者の日本婦人たちと日本語世代の台湾人たちに対して、聞き取り調査を行った。そして、玉蘭荘の出版物と会誌の調査収集をした。

### 3.聞き取り調査の際に使用した言語―

基本的には日本語である。ただし、それぞれのインフォーマントの持つさまざまな歴史経験によって、片言の<sup>ホロ</sup>河洛語か中国語ができるインフォーマントも少なくないので、彼（女）たちのその時に語られた言葉を自然に対応することを原則とした。

### 4.聞き取り調査の記録手法―

初対面する人はほとんどのため、調査表のようなものはあえて用意しなかったのである。できるだけ調査対象者たちの自らの語りを重視し、その中に新たな問題点が発見できるように努力した。また、ほとんどの聞き取り調査もあえて録画せずに、主に筆記によって実施した。場合によっては了承を得たうえで録音をした。

インタビューの時間は一人あたり、平均1時間～2時間ぐらいだが、3時間～5時間に及んだケースも少なくない。また、ほとんどのインフォーマントとは、その後も手紙で補足調査を行った。

## 四、調査成果

### 1.聞き取り調査―

三―2をご参照ください。

### 2.史料調査―

特定の図書館や資料館でしか所蔵していない多くの史料、たとえば各地域の出身者が結成した会の会報と名簿、小学校や中学校の同窓会誌と名簿、私家版の体験記などを収集することができた。また、聞き取り調査とともに、各個人が所蔵する古い写真、地図、ハガキ、手記、私家本、勲章、昔の小学校の家庭通信簿、戸籍登録名簿などの貴重な一次史料も多く収集することができた。

## 五、考察（\*成果報告会でいくつかの史料と事例を取り上げて検討する。）

- 1.さまざまな歴史体験を聞き取ることを通して、現在利用しうる文献に書かれていない戦時下と終戦直後の台湾の社会的状況をもう少し知ることができた。
- 2.戦争に積極的に協力することを通して、代表的な「皇民＝日本人」と自認しようとする内地人。  
あるいは、そのようにせざるをえなかった内地人。
- 3.戦争に積極的に協力することを通して、「皇民＝日本人」に同一化しようとする本島人。  
あるいは、そのようにせざるをえなかった本島人。
- 4.戦争下における「住民共同体」というような意識の養成。
- 5.「内地人」、「沖縄人（琉球人）」、「本島人」という三つのカテゴリーの複雑な政治的・社会的・経済的關係性。  
時には「内地人」―「沖縄人（琉球人）」―「本島人」というような順列で、時には「内地人」―「本島人」―「沖縄人（琉球人）」というような順列になる。
- 6.「内地人」は終戦後の体験、たとえば「不文明の中国人」との対面、「文明化した植民地」よりも「遅れて貧しい内地」を目にしたこと、「内地」における「引揚者」に対する差別などに影響されて、日本の台湾植民地支配を肯定的に評価したり「植民地台湾」を理想化したりし、「我らのふるさと台湾」へのノスタルジアが強化された傾向がみえる。
- 7.同じく、「本島人」も終戦後の体験、たとえば言語（日本語も<sup>ホロ</sup>河洛語も）禁止政策や「台湾人」の社会的・政治的地位の上昇を抑圧する政策などに影響されて、日本の台湾植民地支配を肯定的に評価し、日本植民地時代に経験した差別政策を忘却してまたは再解釈する傾向がみえる。
- 8.現在においてもなお再構築されつつある「日本の神話」と「台湾の中の日本」。

## 六、関連の研究業績

### 1. 口頭発表一

- ① 「台湾在住内地人の戦時下の生活体験に関する覚え書—1940年代の台北市を中心に—」、国際日本学研究会、第四回国際学術大会@北九州市立大学、2010年8月8日
- ② 「The Life History of People in Imperial Japan: A study of the Asia-Pacific War within the “Naichijin” who Lived in Colonial Taiwan」, Osaka University Forum 2010「Globalization and Conflict: Entanglement between Local and Cosmopolitan Orientations」@University of Groningen, the Netherlands, 29, September, 2010
- ③ 「台湾における日本語によるシルバー・ディケアセンター『玉蘭荘』に関する一考察—日本と日本語に対する共感という場所性をめぐって—」、大阪経済法科大学アジア研究所月例研究会@大阪経済法科大学アジア研究所、2010年11月4日
- ④ 「台湾台北市における日本語高齢者デイケアセンター「玉蘭荘」の研究」、日本順益台湾原住民研究会2010年度第3回研究会@沖縄国際大学、2011年3月6日

### 2. 論文一

- ① (掲載決定) 「台湾における日本語による高齢者デイケアセンター『玉蘭荘』に関する基礎的研究『東アジア研究』第55号、2011年3月(刊行予定)
- ② (執筆・投稿中) 「台湾における日本語による高齢者デイケアセンター『玉蘭荘』から見た在台『日本人』の『戦後』」
- ③ (執筆・投稿中) 「在台『日本人』の中のアジア・太平洋戦争」

## 七、今後の課題

1. 関連のある戦時中と戦後の統計資料や法律条例などと合わせて、口述資料を再検証しなければならない。
2. 一次史料を二次史料と合わせて検証し、整理していく作業が必要である。
3. 貴重な一次史料を第三者の研究にも活用できるような資料化の作業をしていきたい。
4. 「内地」から見た「植民地台湾」というような課題をも検討の視野に入れて、それは戦後の日本社会の「引揚者」に対するまなざしにどのような影響を与えたのかを明らかにしなければならない。
5. これまでは可能な限り、多くの人びとの体験を記録することを最優先してきたが、これからは録画という記録手法を加えて、これまでインタビューした人たちの中にいくつかの代表的な歴史経験を持つ何人かのインフォーマントを中心に再調査をして、彼(女)たちの体験の関連性を検討して時代的位置付けをする必要がある。
6. 現在の台湾にある玉蘭荘以外の日本語で活動しているコミュニティ、たとえば「友愛会」という日本語世代の台湾人を中心に結成した日本語を勉強する交流会の実態を調査し、玉蘭荘との相違点と類似点を比較して検討するのは興味深いと思う。

---

i 「日本人」という定義を再検討するのは本研究の目的の一つであるため、ここでは調査対象を最初から「日本人」と「台湾人」に分類せずに、「内地人」と「本島人」というような当時の行政上の分類法に基づいて議論をはじめたい。なお、当時において、本島(=台湾)、またはその他の外地に生まれた「日本人」であっても、「内地人」と称されたのである。ただし、たとえ内地に生まれた「台湾人」であっても、「本島人」と称されたことを記しておきたい。

ii 1989年に設立された日本語によるシルバー・ディケアセンター。活動日は週に二回で月曜日と金曜日の朝十時頃から午後三時頃まで。活動内容はとても豊富で、先ずは懐かしい歌を皆で歌うことから始まり、礼拝、専門講座、健康講座、おしゃべり会(健康、趣味、生活等について)、カラオケ、外来語、映画鑑賞、色々な手工芸指導、お誕生日会、交流会等がある。また、特別行事も、ピクニック、クリスマス、創立記念礼拝、音楽会、バザー等のイベントがある。また、「玉蘭荘だより」(日本語/中国語の二版)を発行している。

iii インフォーマントの選定について、前回の研究調査では、植民地時代の台湾に生活した経験を持つ人たちの現在の地域会や同窓会などのネットワークを全般的に把握できて、関連のある重要な出版物を収集することができたため、今回はそれらを活かして、さまざまな歴史経験を持つ方々と事前に連絡を取ることができて、聞き取り調査を受け入れて頂けた。なお、八重山地方での調査は今回ではじめてのため、インフォーマントを探す時に、地方の郷土史家たちに協力して頂いた。

iv 台湾関係者相互の連絡・親睦・共栄を目的とする組織である。事業の内容は日台間の相互理解の促進、台湾関係の重要図書・資料の収集および活用利便性の向上、慰霊法要、会報「台湾協会報」の発行、高齢者の福祉などである。